



saishoji.info

さいしゅうじ
西照寺宗派 真土真願
浄土本願

令和7年1月 第91号

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

元日

元龍谷大学講師

辻本 敬順

新年、おめでとうございます。

「一年の計は元旦にあり」という

諺があります。皆さんは、今年、

どんな計をお立てになったのでしよ

うか。「今年から日記をつけよう」

「今年から禁煙をしよう」「今年か

ら禁酒をしよう」などなど……。

しかし、あまり成功した試しがない

のです。皆さんはどうですか。

この諺は正式には、

一日の計は朝にあり、

一年の計は元旦にあり

と言います。一日をどう過ごすか

という計画は朝に、一年を通して

どう過ごすかという計画は元旦に

立てるのがよい。何事にも初めが

肝心で、初めに周到な計画を立て

準備をするべきである、という意味

の諺です。

中国には、

一年の計は春に存り、

一生の計は勤（勤め）に在り、

一日の計は寅（早朝）に在り

という文があります。ここでいう「計」

は「生計」のことで、「二年の生計は春

の耕作にかかっている。もし、春に耕さ

なかつたならば、秋の収穫は望めない。

同じように、一日の生計は早起きに、

一生の生計は若いときの勤勉にかかつて

いる」というのです。

お釈迦さまの弟子サミッデイは、

王舎城の温泉精舎にいました。そこへ天

人がやつて来て、「お釈迦さまに『一夜

賢者の偈』を教えてもらえ」と言いま

す。その偈が『大迦旃延一夜賢者経』

にありました。

過去を追うな。

未来を願うな。

過去はすでに捨てられ、

未来はまだ来ない。

だから、ただ現在のことを

ありのままに観察し、

動揺することなく、

よく理解して、実践せよ。

ただ今日すべきことを熱心になせ。

明日、死のあることを誰が知ろうか。

かの死神の大軍と

会わないわけはない。

このように考えて、熱心に

昼夜おこたることなく励む人、

このような人を一夜賢者といい、

寂靜者、寂黙者と人はいう。

『阿弥陀経のことばたち』三六頁 参照

新しい年を迎えて、こころ新たに決意

を固めるのはたいへん素晴らしいことです

が、それを実行するのは、今日一日の

生き方にかかっているようです。一年は

一日一日の積み重ねですね。

『行税法話集 人生の折々に』（本願寺出版社）より引用

令和五年一月に、山門前の伝道掲示板へ、

【「今年こそ」は「今日こそ」の 積み重ね】

と書きしました。併せてご紹介いたします。住職



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真宗
浄土本願寺

第92号 令和7年2月

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

恩師のまなざし

本願寺派 司教 武田 一真

これは利井明弘先生にお聞かせいただいた話ですが、お父様の利井興弘先生の三回忌のときのことです。お寺さんもたくさん集まってくられ、大坂のご自坊で法要が勤まりました。ご法要が終わりました、みなでお斎をよばれましょうという場面になりました。お斎の準備は、ご門徒のあるお婆ちゃんが指揮をとってご準備くださったようです。みな席につきまして、明弘先生が「きようはみなさん、ありがとうございます。父もご往生させていただいて、三回忌を迎えました。きようは懐かしいお話など聞かせていただきたく思います」とご挨拶をされまして、食前のことを唱和して、合掌して「いただきます」とお弁当箱のフタをとるわけですが、

そのときあちこちから「あつ」と声が上がったそうです。なかはバラ寿司だったそうです。亡くなられた興弘先生はたいへん有り難い方であつたそうですが、同時に厳しい方でもあつたようです。お仏事するときお肉やお魚、雑のものを許される方ではなかったわけですね。みんなよく知っておりましたから、当然今日はお精進だと思つていたわけですが、バラ寿司だったわけで、卵や穴子や、かまぼこなどがのつていたのでしよう。「あつ」と声があがる。その声を聞いて、調理場におられたそのお婆ちゃんが飛んでこられて、みんながもらえる前で、畳にひたいをこすりつけるようにして、「申し訳ございませんでしたー！」と仰つたそうです。何か手違いがあつたのだらうな、ということはすぐわかりましたので、「まあまあ、こういうこともありますから、いいですよ」とみんなお婆ちゃんをなだめたそうで

ですが、お婆ちゃんは「申し訳ございません！すべて取り換えさせます」と一歩も引かれなかったそうです。そう言いましても、みんなもう席についているわけですから、どうにもなりません。押し問答になり、みかねた施主の明弘先生が、「まあまあ〇〇さん、父もきびしい人やつたけど、もう亡くなつて、今日は三回忌や。きようはこれでええにしましょうや」と気を遣つて言われました。するとお婆ちゃんは一言、「お亡くなりになられた、いうことは、今ここにおられる、いうことですね！こんなに恥ずかしい話はありません！」と仰つたそうです。（中略）お婆ちゃんは、目には見えないけれども、「なんまんだぶつ」「なんまんだぶつ」このお念仏の声のなかに、仏さまとなつて還りきたつて、寄り添いつづけ、導きつづけ、見守りつづけてくださつてある先生と、ともに生きておられたということでありましょう。

『情をもつてねがいて趣入すべし』（藤鷲会）より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土真願
浄土真宗

第93号 令和7年3月

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

人生の日暮れ

本願寺派 勸学 深川 宣暢

私も少し年をとりましたから時々、寝ながら考えます。布団か

ぶりながら、このまんま、目が覚めなんだからどうしよう、どうなるだろうか、ちよつと準備しておかない

かんことあるな、こういろいろ考えながらも、でもよく考えたら、生

まれてきた時には何にも持たずに真つ裸で生まれてきたじゃないか。

その間には、いろんなものを着せてもううたり、脱がせてもううたり。

今度は自分で着るようになり、脱ぐようになり。あるいは柱を立て

て屋根を葺き、そうやっていくけれども、終わっていくときには、ま

た何にも持たずにたった一人で真つ裸で終わっていくのですよ。これが

我々のすがたですよ。生きている間の人生が良からうが悪からうが、

立派なことをしようがすまいが、人から褒められようが褒められまいが、全く無関係に、たった一人で出かけねばならんのが私どもです。

でも、良かったですね。私どもは一人じゃないですよ。あなたが生まれる前も、生きている今も、そして死んでいつ

た先も、「私はあなたとともにあるのですよ」というナンマンダブツの如来様が、

私に届いてくださるのです。（中略）「親のない子は磯辺の千鳥 日暮れ

日暮れに袖しぼる」という歌があります。親のない子、世の中では一人子、

孤児、みなしごなどと言われますが、その子であつても、昼間のうちは近く

の子どもたちを集めて、あつちへ遊び、こつちへ遊びと、ちよつと千鳥が群れを

なしてチーチーチーと飛びまわっているように過ごしておるけれども、その子

が寂しいのは日暮れです。夕暮れです。親のあるところからは声がかかる。さ

あ早う帰っておいで、ごはんにするぞ、早う帰ってお風呂に入りなさいと、声がかかるが、親のない子がおつたとすれば、その子は誰が呼んでくれるのか、誰が

待つていてくれるのか、誰が私を育ててくれるのだろうか。その子が寂しいのは日暮れだという歌です。「日暮れ日暮れ

に袖しぼる」という、千鳥が虫をつむいでいるのか知らんけれども、それが泣いている姿に見える、という歌ですね。

人生の日中には、あるいは人を引き連れ、あるいは人の上に立つて、あるいは

友人たちと一緒にあつちへ遊びこつちへ遊びするかもしれないけれども、もし本当の

親様を持たないならば、寂しいのは日暮れですよ。人生の日暮れは寂しいぞという歌です。私どもは如来様がおいででよ

かった、親様を持つててよかったですね。

『情をもつてねがいて趣入すべし』（藤鷲会）より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

※文中にある歌は以前に作られたものであり、現在は児童養護施設等が充実し、子ども達の暮らしも支援されています。住職



saishoji.info

さいしゅうじ
西照寺浄土真宗
本願寺派

令和7年4月

第94号

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

お釈迦さまの像がない？

本願寺派 勸学 内藤 知康

浄土真宗の教えは、阿弥陀さま一仏に帰命し、他の仏・菩薩には帰命しないというものです。しかし、それはお釈迦さまをないがしろにしているということではありません。

浄土真宗において、お釈迦さまと阿弥陀さまとの関係は、いろいろに考えられます。たとえば、お釈迦さまのお仕事は教えるということであり、阿弥陀さまのお仕事は救うということ。お釈迦さまが何を教えられるのかというと、「一切の生きとし生けるものを救おうという願いを発し、その願いを完成された阿弥陀さまというお方がおられるよ」ということを教えられるのです。言い換えますと、「阿弥陀さまに帰命しなさい」と教えられるのです。私たちが阿弥陀さま一仏に

帰命するのは、お釈迦さまの教えにしたがっているのですから、決してお釈迦さまをないがしろにすることにはなりません。（中略）

親鸞聖人がいただかれた阿弥陀さまの他力の救いは、私たちの力が役立つのではなく、ただ阿弥陀さまの力のみによって救われるというものでした。つまり、迷いから悟りへ歩むのに役立つものを何一つとして持っていないものが救われる教えです。浄土真宗では、阿弥陀

さま以外の仏さまにはこのような救いはできないといただいています。お釈迦さまの教えも、阿弥陀さまの救いについて以外の教えは、自分の力を役立たせて悟りへ向かって進むというものばかりです。

このような救いを成り立たせている阿弥陀さまの願いは他にありませんので、親鸞聖人は、「越世希有」つまり、「世に超えてまれな」と仰いでおられます。

ですから、自分の力ではどうにもならない私たちが阿弥陀さまに帰命し悟りに至ることができるようになつてこそ、お釈迦さまに本当に喜んでいただけます。このこそがお釈迦さまの願いに本当に応え、お釈迦さまの願いを大事にすることなのです。

親鸞聖人はまた、お釈迦さまという方は、私たちが救うために、阿弥陀さまがこの世界におすがたを現されたお方であるといただいております。つまり、お釈迦さまは、そのまま阿弥陀さまだということなのです。

まとめてみますと、弥陀一仏への帰命は、お釈迦さまの教えにしたがうということであり、またお釈迦さまの像を安置しないのは、お釈迦さまがそのまま阿弥陀さまであるからなのです。

『どうなんだろう？ 親鸞聖人の教えQ&A』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています
※四月八日は、お釈迦さまがご誕生になられた日「仏生会（花まつり）」です。住職



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土
浄願寺

第95号 令和7年5月

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

光いっぱいにしていく責任者

兵庫県東光寺 元住職 東井 義雄

皆さん、東昇先生という先生の

お名前、聞いたことありませんか。

京都大学の名誉教授で、一ミリの

百万分の一、こんな小さな世界を

研究していらつしやる先生です。日

本ではじめて電子顕微鏡をおつくり

になった先生です。

この東先生がね、猫は生まれてす

ぐ人が育てても猫に育つ。犬は生ま

れてすぐ人が育てても犬に育つ。と

ころが、人間は人間の子に生まれ

たからといって、人間に育つとは決

まっていない。今日の学者の定説で

は、約五千通りの可能性を持って

生まれてくるとおつしやつているん

です。

東先生のそのお言葉を讀ませてい

ただきながら、思い出しましたのは、

今から五十年あまり前、インドの

山奥で、狼の住んでいるほら穴から、

二人の人間の女の子が発見されました。

狼が、赤ん坊をさらつていつて、穴の中

で育てていたんです。

小さな赤ん坊を育てて、ずいぶん長

い間育てられたんでしょう。推定八つば

かりになつていたんですが、人間の世

に連れ戻されて、一生懸命人間に育て

る教育をやったんですが、とうとう二

人とも、人間に戻りきることができな

いで亡くなつてしまいました。真つ暗闇

の中でも、目がらんらんと光つて、何で

も見える。何十メートル先にある餌が、

鼻でわかる。

餌があるぞということがわかります

と、八つばかりになつていたその女の子

も、二本の足で立つこともできないもの

ですから、四つ足で、ものすごい勢いで、

飛んでいつても、手を使うことができま

せん。貪り喰う。夜中の一定の時刻に

なると、遠吠えをやる。人間に生まれ

ても、狼が狼の暮らしの中で育てると人

間の子も狼になる可能性さえ持つている

んですね。（中略）

その五千通りの可能性の中からね、ど

んな自分を取り出していくか。皆さん

一人ひとりがその責任者なんですよ。

皆さんこんなたくさんいるように見えま

すけどね、自分は一人しかいない。

大阪のNHKから招かれて出向しまし

た。国鉄大阪駅の地下を歩いてますと

ね、たくさんの方が、ぎつしり歩いている。

その時に感じたんですが、同じ人は一人

もいないんですね。皆さん一人ひとり違

うんですね。こんなにたくさん人がいる

のに、同じ人が一人もいない。

その時はつと気付いてみたら、私も世

界でただ一人の私なのだということとし

た。その世界でただ一人の私を、どん

な私に仕上げていくか。その責任者が

私であり、皆さん一人ひとりなんです。

『正直者からは正直者の光が』（探究社・法蔵館）より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

また、当時の呼称のまま掲載をしています



saishoji.info

さいしゅうじ
西照寺宗派 浄土真宗
本願寺

第96号 令和7年6月

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

故人の思い出に聞く

龍谷大学 名誉教授 浅井 成海

親鸞聖人が八十八歳の時、乗信房にあてたお手紙の中に、故法然聖人の仰せとして、浄土宗の人は愚者になりて往生すと書いておられます。

〔註釈版聖典〕七七一頁

親鸞聖人が法然聖人と生き別れとなられたのは三十五歳の時です。から、すでに五十年余りもたつていました。

しかし、八十八歳となられてなお、いきいきと法然聖人の言行を記録しておられるということは、常に法然聖人に遇い続けられたのだと言えましょう。

お念仏申し、お念仏に聞くとともに、常に故人と会話し、出遇つていかれたとみることができます。

「お念仏に聞く」とは何を聞かせ

ていただくことでしょうか。

善導大師のお言葉に「二河白道」のたとえがあります。それは、お釈迦さまと阿弥陀さまのお勧めによつて「浄土のみ教えを依りどころとせよ」と喚びかけてくださることなのです。また、み仏さまの大慈悲心に遇い、み仏さまが私に尽くしてくださるいろいろな手だてをお教えくださることなのです。

親鸞聖人はお念仏の喚び声の中に、法然聖人の言行と出遇つていかれました。そして、法然聖人は阿弥陀さまの化身で、勢至菩薩が法然聖人となつて私にみ教えを伝えてくださつた、と受けとめられたのでした。

最近、同居しておられたお義母さんを亡くされた方から、「長年生活をともししてきましたので、義母の思い出は尽きません。浄土真宗では義母が私たちのところに還つてきて、私たちを導いてくださるという還相回向の教えを説

きますが、どのように聞かせていただきますか」と少し涙ぐんでのご質問を受けました。

私は「お念仏申させていただき、お念仏を聞かせていただく中に、いろいろと会話をしたり、思い出させていただくことではないでしょうか」と申し上げました。

「あんなこともあつた。こんなこともあつた。あのようにも話していたな」と故人への思い出は尽きませんが、常に故人と会話し、故人を偲ぶということは、帰するところはお念仏に聞くとところからお教えいただけます。

もちろん、特に故人の日常の言行を想い出すというよりも、み教えにかかわるいろいろな思い出をよみがえらせることになります。（中略）

お念仏に聞く生活の中で、今は先人のほたらきを還相の菩薩の姿として聞かせていただくのです。先人より一つ一つお教えいただいています。

『浄土真宗 やわらか法話2』（本願寺出版社）より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真宗
浄土真宗
本願寺

令和7年7月

第97号

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

念仏の申される人生

本願寺派 勸学 梯 實圓

法然聖人が、「この世のすぐべきよ
うは、念仏の申されるようにすぐべ
し」と言われています。「お念仏の
申される人生ならば、どんな生き
方をしようと、すばらしい人生で
ある」と言われています。「その人
その人によつて、どんな生き方をす
るかはみんな違う。それぞれ生き
られるように生きればいいのだ。し
かしその中で、お念仏が申せる人
生、お念仏に統合された人生を生
きなさい。如来さまに喚び覚まさ
れながら、導かれる人生を生きる
ことが尊いのだ」と言われています。
「お浄土へ往くのだから、この世は
どうでもいい」とは言わない。病氣
をした時に、「お浄土参りを目指
している人間が、薬を飲んでもいい
のですか」と法然聖人にたずねた

人がいました。そう聞かれた時、法然
聖人は、「お念仏の申せる体を大事に
しなさい」とおっしゃっています。仏さ
まの教えを確かめていく人生は大切な
道場であるというのでしよう。お念仏
の申せる体をいとわなければならぬ。
そのためには、薬も飲みなさい。身体
も大事にしなさいとおっしゃっています。
「欲を起こすための体を養うのとは違
う。腹を立てるための体を養っているの
とは違う。み教えを聞き、お念仏の申
せる体を養っているのだ」と法然聖人は
おっしゃっているのです。

このあたり、念仏の人生という一本の
筋がきちつと通っていますね。できれば
そのように思つたほうがいい。「なぜ薬
を飲むのか」と聞かれたら、「お念仏
を相続させていただくのだから、薬を
飲まなければ」と言うのですよ。です
から、死に急ぎすることはいいのです。
教えに呼び覚まされる人生は楽しいも
のです。また死すべき時が来れば、受
け容れればよろしい。さとの開けるご
縁として、死をありがたく受け容れれ
ばよろしい。その時、死は空しい亡びで
はなく、真実に目覚めた仏陀としての
誕生の意味を持てきます。

生きるということは、仏さまのみ教え
に導かれながら、極楽に生まれて往く、
浄土に生まれて往く人生を生きていく
ことです。死ぬことは、浄土が開けるご
縁である。となりますと、生きること
も死ぬことも一つの念仏に統合された、
「生死を超えた生」になります。その
ような人生を生きていくことが、「往生
極楽のみち」というものです。それを
はつきりと聞き質し、それさえはつきり
としていれば、あとは何が起ころうとも、
それはその時その時解決すればいいので
す。人生の一番の根幹は、生と死を包
む一貫した道を確かめていく、それが
一番大事なことです。



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土
浄願寺

令和7年8月 第98号

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

叱られた恩を忘れず墓参り

相愛大学 学長 釈 徹宗

「叱られた恩を忘れず墓参り」とは、奥行きのある心情が伝わる、なんとも言い難い味わいを感じさせる川柳ですね。まず「叱られた恩」と語るところに妙味があります。我々は、なかなか「叱られた恩」などといった気持ちになれませんからね。

「恩」という漢字は、先人からのめぐみや慈しみを表しているそうです。「因」は、敷物の上に、人が両手両足を広げて、全身でめぐみや慈しみを受けている姿からできているとのこと。

「叱られた恩」とは、叱られたことがめぐみや慈しみであると語っているのです。これは「叱った方が、本当に相手を思つて叱った」と「叱られた方が、叱つてもらつて有難かつた」との、二つが合わさらないと成り立たない

事態だと思っています。

仏典に出てくる「恩」という言葉ですが、サンスクリット語のクリタの翻訳語として使われます。クリタは、へ先人が私のためにしてくださったこと」といった意味になります。また、クリタジニヤという用語もあります。これはへ先人が私のためにしてくださったことをしっかりと受けとめる」というような言葉ですので、「知恩」と訳されています。

日本仏教には、「知恩報徳」といった教えがあります。この場合の「徳」はへ周りに与える良い影響」といったところです。つまり、「知恩報徳」は、先人から私へと出されたパスをきちつとキャッチして、そして私の周りへとパスを出していく、そんな態度のことになります。

私の友人に有名な元ラグビー選手がおります。もう現役を引退して、大学の教員をしています。その友人が、「ラグビーボールは楕円形なのでとても扱いが難

しい。その扱いが難しいものを、丁寧にパスをつないでいくところにラグビーの魅力と喜びがある」と言っていました。「心のこもったパスと、雑に出したパスは、キャッチした時にわかる」のだそうです。

先人から出た仏法というパスをきちんと全身でキャッチして、周りへと次世代へと心のこもったパスを出していく。これは、今を生きる、我々の一つの果たすべき役目ではないでしょうか。

仏法は、二千五百年以上にわたって、鍛錬に鍛錬が重ねられてきた体系です。人々の知恵の結晶といつてよいでしょう。そこには本物の言葉があります。本物の言葉は、その時すぐにピンとこなくても、心身に潜んで、いつか花咲くことになります。「叱られた恩を忘れず墓参り」の句を詠んだ人も、おそらく本物の言葉で叱られたに違いありません。ですから、「本物の言葉を聞く」「本物の言葉を語る・伝える」という体験が大切になつてくるわけです。



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土
浄願寺

第99号 令和7年9月

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

現在に生きよ

本願寺派 勸学 村上 速水

かくて「諸行無常」という言葉

は、「いたずらに昨日を思いわず

らつてはならぬ。また明日への空し

い夢をいだいてはならぬ。ただ、今

の瞬間に全力を注いで生きよ」と

教える言葉であります。まことに

現実逃避どころか、現実の私を最

も意義あらしめよと教えるのが仏

教であり、そこに生活の指導原理

としての諸行無常のことわりがある

のであります。

これに関連して、近ごろ私が感銘

した話があります。これは先年、

戦後の中国事情を視察して帰られ

たT氏が、その書物の中に書いてお

られた話なのですが、それにより

ますと、現在の中国の小学校四年

の教科書の中に

春は四季の中で一番よい季節である。

という言葉が載っているそうです。ただ
それだけの文章ならば、わざわざとり
あげる必要はないのですが、実はそれ
につづいて

四季の中で夏は一番よい季節である。

四季の中で秋は一番よい季節である。

四季の中で冬は一番よい季節である。

と、あるのだそうです。これは大変考

えさせられる文章だと思うのです。T

氏は、こういう話を紹介せられたのち

「ここに現代中国の逞しい生き方がうか

がわれる」と結んでおられるのであり

ますが、私もなるほどと感心させられ

ます。春や秋がよい季節だということ

はよくわかりますが、夏も冬もまた、

一番よい季節だと教えているところに、

味わつて見るべき問題点があります。

私たちは一体どうでしょうか。夏が

来れば早く秋が来ればよいと思い、冬

が来れば早く春が来ればよいと思ってい

る。しかし暑い夏、寒い冬に満足でき

ない人は、結局、春が来ても秋が来ても、

やはり不平を云っている人ではないで

しょうか。現在の季節に満足できない人

は、結局どんな季節にも満足できない

人ではないでしょうか。逆に、暑い夏に

も寒い冬にも、それぞれにその季節の喜

びを感じるこの出来る人だけが、春

にも秋にも本当の喜びを満喫することの

出来る人ということができましょう。で

すから中国の教科書にある四行の文章

は、別の表現をすれば

一年中で今が一番よい季節である。

今をおいて、それ以上によい季節はない。

ということになるでしょう。現在を

力一杯生きぬけという逞しい生き方、

(中略) それが仏教の「諸行無常」の

真理が教えるものだといったら、みなさ

んはさぞ驚かれることでありましょう

が、実はその通りなのであります。

『人生の考え方』(百華苑)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています

また、この書籍は平成七年に発行されたものですので、

文中に出てくる教科書などもその当時のものになります



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土
浄願寺

第100号 令和7年10月

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

仕合わせ

本願寺派 司教 内藤 昭文

「しあわせ」になりたいと願われない人はいないでしょう。また、「しあわせ」を否定する考えは嫌われるでしょう。では、その「しあわせ」とは何でしょうか。ここで、質問をしてみたいと思います。みなさん、「しあわせ」と書きなさいといわれたら、どう書きますか。学生に質問したら、「しあわせ」と平仮名で書くといった人が最も多かったです。漢字ではどう書きますか。私がお話をする所で質問すると、ほとんど「幸せ」と答えがcaえつてきます。

(中略)

皆さんは国語辞典に「幸せ」の見出し語がないことをご存知ですか。たとえば、「広辞苑」の見出し語は「仕合せ」しかありません。この「仕合せ」は、私の大好きだった

歴史小説家の故・司馬遼太郎氏が小説

の中で多用していました。この「仕合せ」の「仕」は「ある人につかえること」だそうです。そういう意味では、「めぐりあわせ」や「宿命(しゆくめい)(しゆくごう)」を意味するといえるでしょう。つまり、生きていく中で、辛いこと・苦しいこと・いやなことがあつたとしても、振り返つて自分の「めぐりあわせ」というか「因縁(いんねん)」を考えて、「仕合せ」と感じる場合のこ

とじゃないかと思うのです。「仕合せ」と「幸せ」、これらは日本人が「しあわせだ」と感じた内容を漢字で表記したにすぎません。どちらで書こうと全く違つたものを意味しているのではなく、「しあわせ」は「しあわせ」なんだといわれれば、そうだと思います。でも、その「しあわせ」の内容をしっかりと見つけることが大切だと思うのです。

親鸞聖人の法然上人との出会い、或い

はご本願との出会いは、敢えて漢字で書

けば「仕合せ」というべきものだと思います。親鸞聖人の生涯は私たちの感覚からいっても、決して幸せであつたとはいえないように思います。幼い頃、両親を亡されたり、流罪になったり、長男の善鸞を義絶(ぎぜつ)(勘当)したりと、私たちにとつては決して「しあわせ」といえるものではないでしょう。しかし、親鸞聖人はそのことを嘆くばかりではありません。「人間の人生は苦難の連続である(一切皆苦)」であることを真正面から受けとめ、その苦難の中で、法然上人と巡り会えたこと、恵信尼様という妻と出会えたこと、そして何といつても南無阿弥陀仏の御本願に値遇できたことなどに、人として生まれたことを慶び、仕合せを感じられたのだと思います。

『仏伝に聞く仏教』(探究社)より引用

掲載文字数の関係で一部を中略してご紹介していますが、中略している箇所に「幸」の字についての説明が載っていますので、ご覧になりたい方は西照寺書庫より貸し出しをいたします。また、本書は平成十一年に発行されたものです。



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土真願
浄土本願

第101号 令和7年11月

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

私への願いに気づけない

本願寺派 司教 安藤 光慈

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

という親鸞聖人のご和讃のことで、

以前に「身を粉にして骨を砕くで

すか？それほどのことですか」と問

われて、少し困ったことがありまし

た。

「恩」という字は、「めぐみ・いつ

くしみ」という意味だといわれます

が、その成り立ちを私は「因」+

「心」ですから、「もとになった心」、

つまり私が育まれるもとになってい

る心と味わっています。

私たちは、さまざまなご縁をい

ただいて生きています。仏教的に

いえば、内なる因と外からの縁に

よって今日の私は成り立っているの

す。因縁所生の私です。その縁の中に

は、私を育み、あるいは変えてくれた

ものもあるでしょうから、「縁」と「恩」

とは少し重なるところもあるようにも

思えます。

しかし、「縁」と「恩」とでは、私が

捉えようとしているところが違うので

す。相手の行いによって私が何か影響を

受けたり、変わったりすることがあつて

も、そこに私に対する思いや願いがな

ければ、それを「恩」とは思いません。

「恩を受けた」という場合には、私に

向けられたその心や願いをいただいてい

るということです。つまり恩とは私を

育み、変えてくれた「もとになった心」

です。

また、「徳」とは功德のことであり、

私あるいは私とその周りの人びとを良

い方向へ進ませる力・はたらきのこと

です。ですから「恩徳」とは、私を良い

方向へ進ませようとする思いや願いであ

り、またその力・はたらきのことをいう

のです。

仏さまは、今苦しみ悩みを抱えて生

きている私をなんとか救い取ろうと願わ

れ、浄土へ往生させ、この命に確かな意

味を与えてくださるのです。私にとつて

これほどの恩徳はありません。「報ずべ

し」「謝すべし」とあるのは、誰かに向か

ていつているものではありません。ご恩徳

をいただいた私が、私自身に向かつて「報

じなければならぬ」「報謝せよ」と命

じているのです。

私が少し困ったのは、こうしたことを

本当に受け止めていくには時間が必要

だと思つたからでした。身を粉にしても

骨を砕いても報謝すべき恩徳であること

に、なかなか気づくことのできない私で

す。

『いのちの栞 如来とわたし』（本願寺出版社）より引用

宮崎県宮崎市真光寺ご住職であり、本願寺派司教の安藤光慈

和上ですが、今年十月一日に六十六歳を二期として往生の素懷

を遂げられました。今まで受けた安藤和上の講義を思い出しつ

つ、和上を偲んで三年前にご執筆なされたものを紹介しました。